

邪馬台国と弘法山古墳

東海大学文学部歴史学科 北條芳隆

はじめに。

松本市弘法山古墳は西暦3世紀の後半につくられたと推定され、その年代は女王卑弥呼が登場する『三国志』「魏志倭人伝」の時期と重なります。信濃地域で最初に登場する本格的な前方後方墳で、後漢代に中国で製作された青銅鏡を副葬し、近江や東海西部地域の土器を供えることから、この古墳づくりには近畿北部・東海地域の勢力が深く関わったと考えられています。つまり邪馬台国の時代に信濃を舞台に活躍した人々の様子を知るうえで、弘法山古墳を含む中山古墳群はまことに良好な考古資料なのです。

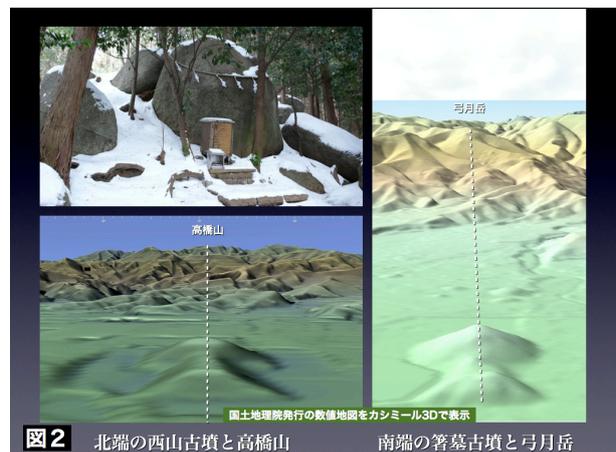
また最近発掘調査がおこなわれ、保存問題で話題となった静岡県沼津市の高尾山古墳は、年代や墳丘規模、木棺のサイズから副葬品に至るまで弘法山古墳と酷似することがわかりました。ですから高尾山古墳と比較しながら弘法山古墳を考えるというアプローチも可能です。そのため今回の講演でも、私は高尾山古墳を引き合いに出しながら弘法山古墳の問題を考えます。なお私の報告では以下の3項目を重視しますのでご了解ください（北條2017）。

①：宗教や政治に関わる遺跡の立地に注目し、周辺地形との関係や方位・天体運行との関係を重視しつつ、その場所に遺跡が営まれた意味を考察する。②：日本列島の原始・古代社会にも上記①の諸要素を組み込む景観設計（ランドスケープ・デザイン）が存在した可能性を見出す。③：邪馬台国の時代の東アジア一帯は寒冷化と乾燥化にみまわれ世情は不安定であった。ただし南方にある日本列島は水稲適地でもあったため、水稲は十分な耐性を備えていた。当時の社会を考察するさいには、この点を重視する。

なお方位の問題を考えるうえでは、日の出と日の入り方位は特別な意味をもちます。東の古語は「日向し（ヒムカシ）」ですし、西の古語は「去にし（イニシ）」です。前者は未来を連想させ、後者は名称どおり過去と深く関係します。太陽の運行に沿わせた価値意識や連想は宗教とも結びつき、人々は東西の方位に相応の神格をみいだしてきました。他界観の拠り所をそこに求めたのです。古代中国の西王母信仰や神仙思想はその典型です。いうまでもなく日本列島の場合は「日出る処」つまり日の出の方位が重視されました。今回の私の報告は、この点と深く関連します。概要を図1に示しました。

1. 「坐東朝西」の景観設計

まず奈良盆地の様相を確認しておきます。この盆地の中央やや西寄りには弥生時代の中心的遺跡として知られる唐古・鍵遺跡があり、邪馬台国の中心地と推定されている纏向遺跡はそこから南東側の三輪山付近の山麓に営まれました。卑弥呼の墓かともいわれる最古最大の前方



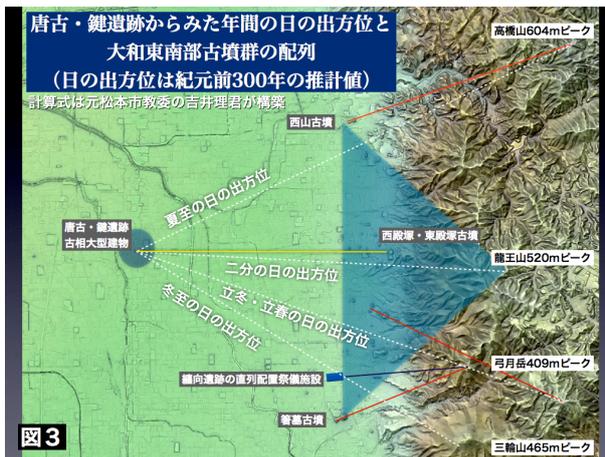


図3

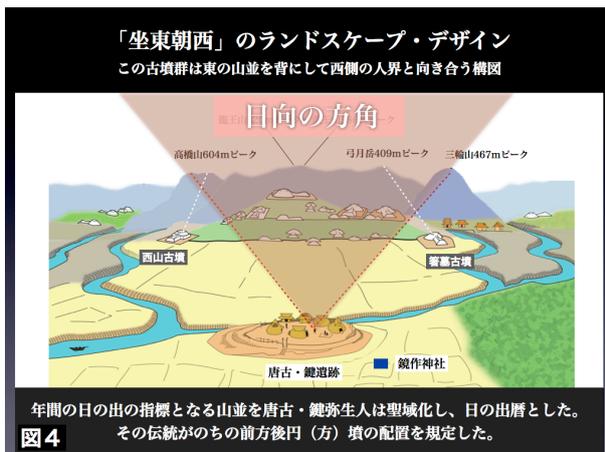


図4

後円墳である箸墓古墳は、この遺跡の南端付近に築造されました。さらにこの古墳の造営を機に、龍王山の山ぎわ一带に大和東南部古墳群が展開します。この古墳群の頂点は西殿塚古墳と東殿塚古墳の2基であり、北端は西山古墳です。箸墓古墳の軸線は直前に廃絶した大型建物Dの軸線を引き継ぐ格好で東の弓月岳409mピークに向きますし、西山古墳の軸線は高橋山607mピークであることも判明しました(図2)。さらに両古墳の中間点を導くと、龍王山520mピークと同緯度であることも突き止められました。

そしてこれら諸遺跡や諸古墳の位置関係や軸線の関係を見ると、興味深い事実が判明したのです。唐古・鍵遺跡の中心的大型建物に観測点を定め、年代を紀元前300年にセットして当時の年間の日の出方位と東の山並との関係を点検してみると、夏至の日の出は高橋山から、冬至の日の出は三輪山から、春分・秋分の日の出は龍王山520mピークからとなりました(図3-計算式は元松本市教育委員会嘱託の吉井理君が構築)。

また弓月岳は唐古・鍵遺跡からみた立冬と立春の日の出の嶺である巻向山の前景でした。二峰の誤差は0.4°です。

つまり西山古墳が高橋山を向く理由は、唐古・鍵遺跡から数百年間にわたって観察され続けた夏至の日の出の嶺であったという経緯を引き継ぐものであり、纏向遺跡の大型建物や箸墓古墳が弓月岳を向く理由も、そこが弥生時代を通じて立春・立冬の日の出の嶺であったことに由来するものだと理解できるのです。さらに大和東南部古墳群が背景の中央に龍王山520mを据えた理由についても、そこが春分・秋分の日の出の嶺であったことに由来するものだったと考えられるのです。

こうした景観設計を「坐東朝西」のランドスケープ・デザインと私は呼んでいます。「日向」を正面に据え、四季折々の日の出の嶺を聖域化させる営みです。龍王山の一带の嶺峰こそが『古事記』の「御諸山」であり、三輪山単独峰ではなかったことも確信できました(図4)。

2. 松本盆地でも再現された「坐東朝西」の景観設計

そして邪馬台国時代の松本盆地でも、奈良盆地とまったく同じランドスケープ・デザインが再現されたことがわかります。現在の南松本駅の西には出川西遺跡があり、この時代の中心集落遺跡であることが松本市教育委員会の長年の調査の結果、明らかにされました(直井2013他)。この遺跡には東海や北陸地域の土器が多量に持ちこまれたので、これらの土地からの移住者も多かったと推測されますし、弘法山古墳や中山古墳群を営んだ人々の本拠地だと目されます。

そして相互の位置関係をみれば、先にみた奈良盆地の様相とよく似ていることがわかります。出川西遺跡第10調査地点からみた西暦250年における年間の日の出・日の入りの推計範囲を図5に示しました。夏至の日の出は袴越山(標高1,753m)付近から、冬至の日の出は伏鉢山(標高1,929m)付近からとなります。弘法山古墳や中山古墳群はその中央前面に位置しますので、日向の嶺の前景にあ

たる低丘陵を墓域に定めた様相だとみることができでしょう。「坐東朝西」の景観設計にほかなりません。大和東南部古墳群がここでは中山古墳群となり、奈良盆地における高橋山は松本盆地では袴越山に転じ、三輪山は伏鉢山になぞらえられた、といえるのです。

3. 弘法山古墳の墳丘主軸と方位

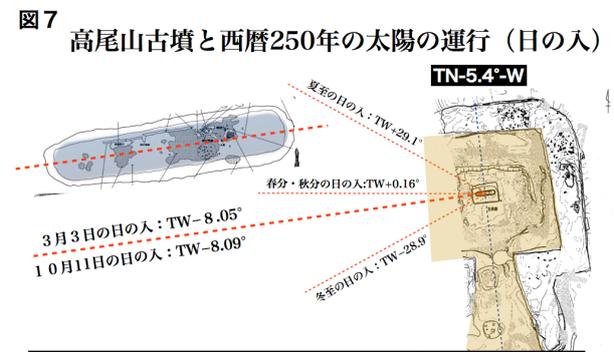
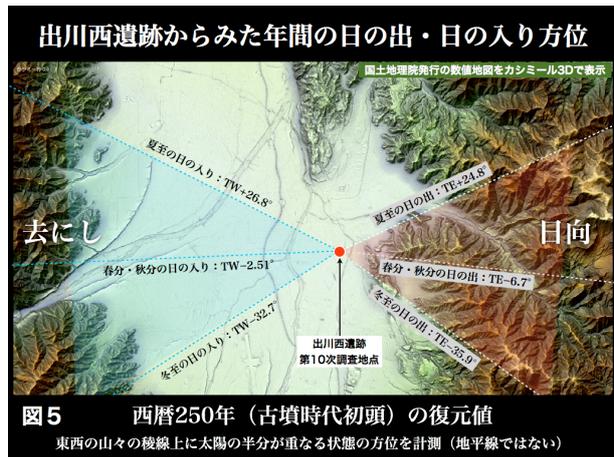
さらに弘法山古墳の墳丘軸線は伏鉢山の方角を向いています。そこで改めて再現シミュレーションをおこなった結果、弘法山古墳は西暦250年の冬至の日の出方位に後方部の正面を向けることがわかりました。ダイヤモンド伏鉢山は、弘法山古墳の前方部に立って後方部側を見据えたとき、冬至の日の出として拝まれたはずなのです(図6)。この事実とはくに重要です。冬至の日の出は全世界で重視されました。古代ローマでは太陽の復活を祈る祭りがクリスマスに転嫁されたことが知られています。そもそも暦の起点は冬至であったともいわれます。祭りの開催時としてこれほど相応しい日取りはありません。

ですから弘法山古墳に葬られた人物は、まず間違いなく「冬至の王」としてこの日の朝に完了する葬送祭のもとで葬られ、魂の復活を予祝されたはずだと考えられるのです。同様の解釈は愛知県の東之宮古墳や福岡県の鋤崎古墳にも適用されますから、前方後円(方)墳の祭祀における一類型だといえます。さらに基本モチーフは天の岩屋戸神話と同じですので、この神話の起源は前方後円(方)墳の初期にまでさかのぼることが確認できたともいえるでしょう。

4. 北辰・南天信仰との関わり

なお高尾山古墳では墳丘の軸線が南北を向き、埋葬施設の軸線は東西を向くことがわかっています。双方の軸線は直交するのです。この古墳に葬られた人物は東枕に寝かされましたし、西暦250年でシミュレーションをしますと日の出は4月と9月の上旬に、日の入りなら3月と10月の上旬に棺の中心軸線と重なることがわかります。アイヌ民族の埋葬儀礼に照らしてみれば、葬儀の当日の日没を見定め、その日の太陽の没入方位に遺体の足を向けさせ寝かす、という埋葬習俗がありますので、それに類するものだったのかもしれませんが。太陽信仰に帰依する埋葬頭位であったことは確実です。図7に日の入り方位の様相を示しました。

問題は墳丘の軸線ですが、この古墳の軸線が真北から5°西に振れることの意味は、北天との関係



アイヌ民族には、葬儀の当日夕方日の入り方位に合わせて死者の足をそちらに向けさせ、日没方位に魂が向かうよう祈念する習俗がある

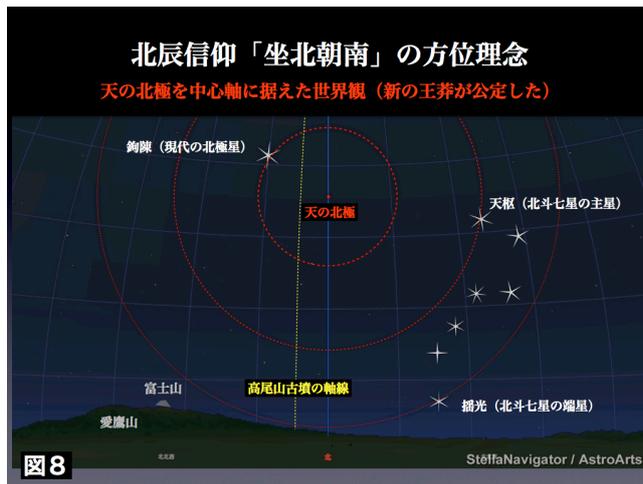
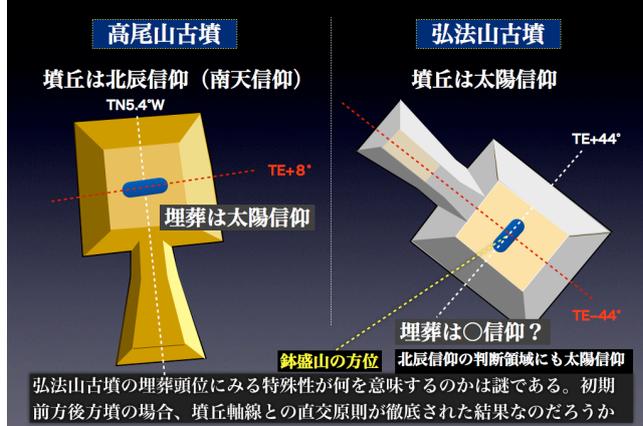


図9 2基の前方後方墳にみる軸線と方位観念



で捉えられます。地球の自転軸の振れ運動である歳差現象を考慮して西暦250年の様相をみれば、現在の北極星（こぐま座の α 星）「鉤陳」は天の北極の回りを $\pm 12.3^\circ$ の最大偏角をもって周回していました。北斗七星の主星（おおぐま座の α 星）「天枢」は天の北極を $\pm 24.5^\circ$ の最大偏角をもって周回していましたし、柄杓の柄の先端にあたる「揺光」の周回軌道は $\pm 36.3^\circ$ だったと推計されます。近畿地方の4世紀代の古墳にみる埋葬頭位は、そのほとんどが「揺光」の周回軌道範囲内に収まり、なかには「鉤陳」の軌道範囲内に収まるものも認められます。高尾山古墳の場合は、埋葬頭位ではなく墳丘軸線が「鉤陳」の軌道範囲内にありますので、この星を見定めて墳丘の軸線を決定した可能性が高いのです。図8に様相を示しました。

このことから前方後円（方）墳の時代には、太陽の運行ではなく、天の北極を尊重する「坐北朝南」の方位観念へのシフトがあったとみられます。具体的には「鉤陳」や「揺光」の周回軌道を見定め、そちらに遺骸を向けさせる方式への転換です。儒教思想の影響

だともいわれますが、じっさいには儒教思想も拠り所とした北辰信仰です。古代中国では新の王莽以後、北辰信仰が公定的な方位理念となりました。その影響が日本列島に及んだ最初期の様相が前方後円（方）墳の埋葬頭位であったと理解できるのです。

3世紀後半の高尾山古墳の場合は、まだ太陽信仰の方が伝統的に重視され依然優勢だったため、埋葬施設については東西方位を選び、墳丘の軸線については北辰や南天信仰を重視したという折衷の様相だったとみられます。古相の「坐東朝西」と新相の「坐北朝南」の両者を折衷する様相は日本列島の各地の政治的・宗教的な施設にも認められますから、高尾山古墳も例外ではなかったと理解できるのです。

しかし弘法山古墳の場合、墳丘の軸線は太陽信仰に沿わせたことが明らかですが、肝心の埋葬頭位は北東を向き、当時の「揺光」の周回軌道範囲から外れています。その理由は謎です。初期前方後方墳の場合、墳丘の軸線と埋葬施設とは直交させることが原則だったとみた場合には、太陽信仰と北辰・南天信仰との同調が本来可能であったものが、松本盆地では東にそびえる背後の山並が高すぎたために、冬至の日の出方位は真東から 43° も南に振れることになり、一方の軸線をそこに合わせると、もう一方の軸線が北辰信仰の許容範囲内を越えてしまうことになった、ということなのかもしれません。松本市教委の竹原学さんや直井雅尚さんにもご教示いただき山岳信仰との関わりも点検してはみましたが、現時点では成功していません（図9）。今後の課題として残されます。

5. 近江・東海地域勢力からの鏡の贈与

では次に弘法山古墳と高尾山古墳の双方から出土した青銅鏡を考えます。上方作系肉彫式獣帯鏡と

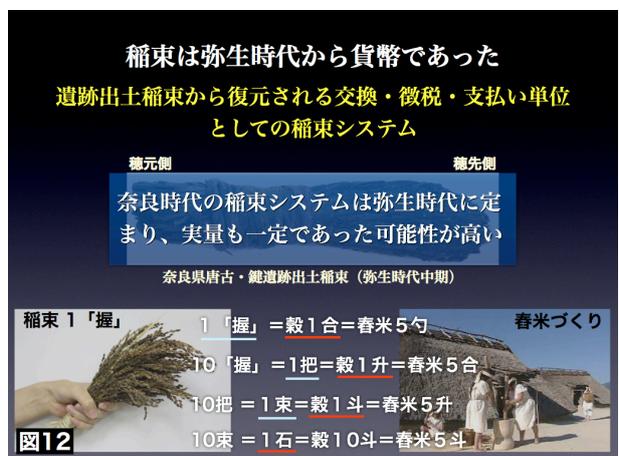
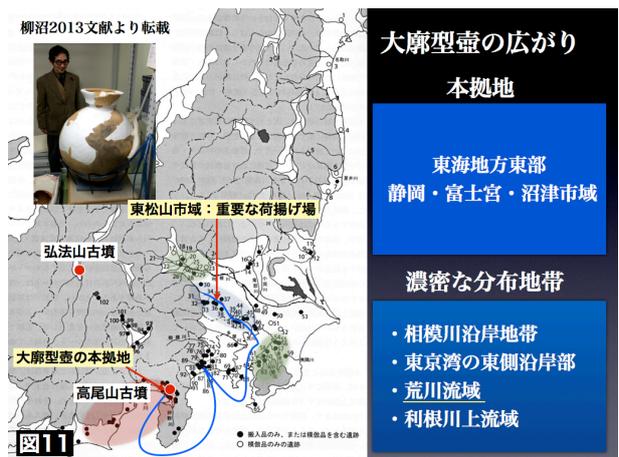
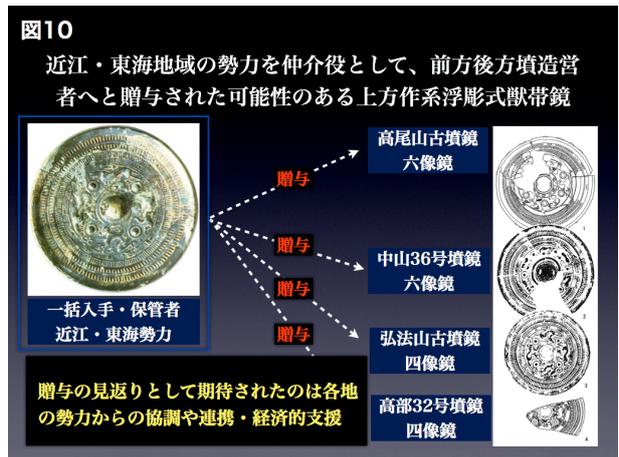
呼ばれる、2世紀後半に後漢王朝の官営工房でつくられた同一型式の鏡がどちらの古墳にも副葬されていました。松本盆地では中山36号墳からも同一の鏡が出土していて注目されます。これらの鏡はそれぞれの古墳の被葬者が独自に中国や楽浪郡から入手したものではなく、おそらく卑弥呼の使者が魏王朝に朝貢するさいに洛陽の市中か楽浪に立ち寄ってこれらの鏡を一括購入し、日本列島に持ち帰った可能性が高いと推測されます（九州大学の辻田淳一郎氏教示）。このときの使者には近江や東海地域の勢力も含まれていた可能性が高いので、彼らによってこの鏡は東海東部や信濃・関東各地の前方後方墳造営者に向けて贈与された可能性が高いと考えます（図10）。

ではそのような鏡の贈与の背景には何があったのでしょうか。見返りに期待されたのは各地の勢力からの協調と連携、とくに経済的支援であったと考えられます。

高尾山古墳がつくられた東駿河での様相を引き合いにすれば、その大枠が理解できます。この時期には沼津市域内で多量に製作された大容量の壺形土器である大廓型壺が関東各地へ運ばれました。その到着先に新たな交易拠点が築かれ、近隣には初期の前方後方墳がつくられるという様相が認められるのです。

問題は、大廓型壺には何が収納され、どのように運ばれたのかですが、内容物は登呂遺跡や山木遺跡など低地部水田から収穫された稲粃であり、壺には木蓋を落とし込んで密閉させ、伊豆半島から駿河湾・東京湾に向けて海上輸送させたのであろうと私は考えています。大廓型壺は白色軽石を多量に練り込むスカスカの胎土で軽量ですから穀物の収納と船運には向く反面、液体は絶対に収納不可能です。さらに状況証拠としては、大廓型壺が持ちこまれた先で新たな水田耕地開発が進められたことです。低地部の水田開発にあたっては種粃としても活用された可能性が高いのです（図11）。

なによりも稲粃は穀物貨幣の代表格ですから、水稻農耕は貨幣生産でもありました。奈良時代に田租とされたのは稲束ですが、束・把・「握」の3階層からなる徴税や流通の単位は弥生時代中期にまではさかのぼり、実量も一定であったことが指摘できます（図12）。つまり関東各地での水稻農耕地の拡大とは、近江・東海そして大和側へも供給可能な貨幣生産の拡大でもあったわけです。その意味での経済的支援が信濃や関東各地に求められ、そのための鏡の贈与であり、前方後方墳祭式の一括供与だったと理解されるのです。



6. 寒冷化した東アジア一帯下での倭人社会

少し視野を広くとって先に述べた状況をまとめます。1世紀の半ば以降に顕在化した東アジア全域を覆う気候の寒冷化と乾燥化は、日本列島の倭人社会にさまざまな影響と作用を及ぼしました。因果関係は次に示す項目順に推移したと考えられます。

①：海面低下による低地部（氾濫平野）の乾燥化。②：低地部の広域水田開発の本格的始動（具体例は岡山県百間川遺跡・大阪府池島福万寺遺跡・静岡県登呂遺跡・山木遺跡）。③：収穫された稲粃を朝鮮半島側との交易原資とする（例えば「弁辰の鉄」を現地に赴き購入するための原資）。④：倭人社会内では稲粃建て市場の確立と市場圏の拡大（魏志倭人伝の記載に「取租賦有邸閣」・「国々有市」と関連記事がある）。

先の大廓型壺の動向は、このうち②と③にかかわる日本列島内での対応の一環だと捉えられます。さらに倭人社会と朝鮮各地との関係については、③とのかかわりがとくに重要です。「魏志倭人伝」

が記載した3世紀前半の様相は「弁辰の鉄」が圧倒的に優勢な状況を示していますが、気候が寒冷化した情勢下では、東アジアにおける稲粃の市場価値は急上昇する局面を迎えたと考えられるからです。すなわち鉄にたいしてさえ稲粃の市場価格は高まり、優位な現物貨幣として朝鮮半島側との交易に活用できた可能性が高いのです。だから3世紀後半の時点に関東内陸部での水稻耕地開発が活発化したのだと捉えられ、こうした環境変動への対処策・有効利用策として古墳時代は展開したと考えられるのです。

最後に、弘法山古墳や高尾山古墳に強い影響を与えた近江・東海地域勢力の王者はどの古墳の主だったのかについて私案を紹介します。それは大和東南部古墳群の頂点に眠る王だと考えます。東殿塚古墳です。定説は全長180mの前方後円墳だといわれていますが、この古墳の前方部は異様に長く、北端にある前方後方墳の西山古墳（全長180m）と同規模・同形墳ではないかと指摘されてきました。私はこの指摘は正しいと考えています（図13）。

いいかえれば前方後方墳は「坐東朝西」の景観設計における頂点を占めていたわけで、その意味において弘法山古墳や高尾山古墳は倭王権とも密接な関係にあったと考えられるのです。図14と図15には、再度松本盆地に展開した「坐東朝西」の景観設計を示します。この景観は風水とも深く絡みます。そこに眠る死者から発する「気」が子孫に好影響を与えることを祈念するという観念です。弘法山古墳や中山古墳群の今後の再調査に期待するところ大です。

